

=====

THE VEDANTA KYOKAI

日本ヴェーダ協会の情報

2005年4月 第3巻 第4号

<http://www.vedanta.jp/multimedia/pdf/newsletter/index.html>

このメールを希望でない方はタイトルを停止と書いて返信ください。

=====

お知らせ

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ第143回生誕記念日祝賀会
プログラム

午後2時00分

- : 祈 願 : ヴェーダの祈り
- : スワミー・ヴィヴェーカーナンダへの献花
- : 定期刊行物「不滅の言葉」特集号披露とスピーチ:
マニラール・トゥリパーティー閣下、インド大使
- : 『瞑想指導』のCD公開(英語バージョン)、
スワミー・プラメヤーナンダジー、
ラマクリシュナ僧団の長老理事及び会計担当
- : 瞑想ガイド - スワミー・メダサーナンダ
- : スピーチ: 山折 哲雄名誉教授
国際日本文化研究センター、京都
- 主題「信ずる宗教、感ずる宗教」
- : 質疑応答
- : 感謝の辞: - A. P. S. マニ氏、祝賀委員会書記
- : 休憩
- : 文化交流プログラム
- 1、三味線: 「日本の四季」
 - 河合 佐季子 - 渡辺 麻子 - 佐藤 里佳
 - 西野 朋子 - 矢田 茜東京藝術大学 音楽学部 邦楽科学生
- 2、賛歌:
日本人グループ:
 - 泉田 香穂里 - 浦田 泰子
 - 篠原 裕美 - 伊藤 敏美インド人グループ:
 - ジャヤ・ナタラジャン - ガヤスリ・モハン
 - ラタ・バラスブラマニアン - ミーナ・モハンタブラ: マサノリ・ヒサモト
- 3、アイヌ音楽:
 - 丸子 美記子 - 八幡 智子 - 北原 きよ子

- 島田 あけみ - 丸子 ちひろ
関東ウタリ会 会員
: 茶 菓。

祝賀会のサイト
<http://vedanta.jp/svc/svc2005/>

目次

- ・ かく語りき 聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ 3月の例会「シュリー・ラーマクリシュナを理解する」
- ・ 今月の思想
- ・ 忘れられない物語
- ・ 例会に出席して

かく語りき 聖人の言葉

「カメは水中を動き回るが、心はどこにあると思う？ 卵を産み付けた岸边にあるのだ。この世の義務をすべて果たしなさい。しかし、心は常に神へ向けているのだ。」

- シュリー・ラーマクリシュナ

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」

- 新約聖書（マルコによる福音書 第12章第17節）

今月の予定（終了分）

協会の行事

・ 4月の例会
テーマ：「私は誰でしょう」
4月17日（日）午前11時 逗子協会（終了）

・ アカンダ・ジャパム
（霊性の連なる修行）
4月29日（金） 午前5時から午後8時まで（終了）

3月の例会

「シュリー・ラーマクリシュナを理解する」

3月20日の逗子例会では、第170回シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会を執り行いました。当日のプログラムは以下の通りでした：午前10時30分からプージャ、アラータイ、献花、11時30分から午前の部（講話）、12時45分から昼食（ブラスード）、午後3時から特別音楽プログラム（インド、日本、欧米の讃歌・巻末の記事をご覧ください）

協会には大勢の方が見え、11時頃になると、礼拝室に入りきれなくなった参加者が隣の集会室にまで溢れてしまい、スワミー・メダサーナンダの執り行うプージャとアラータイを何とかして見ようと、皆、静けさを保ちながらも身を乗り出していました。続いて、参加者全員が二、三人ずつ祭壇に花を捧げました。そして集会室に移動し、午前の講話「シュリー・ラーマクリシュナを理解する」を聞きました。

スワミーはたくさんの方がいらしたことに大変喜び、例会および第170回シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会に参加された皆様に心からの歓迎の言葉を述べました。「本日初参加の方の多くは学生さんですね。インドの音楽に興味を持たれているだけではなく、インドの霊的伝統にも関心を寄せられている。何事も真剣に研究をするのであれば、こうした興味は非常に大切です。というのは、インド文化、音楽、舞踊のまさしく根底にあるのが宗教や哲学だからです。そして、何事にもお金のかかる日本で、当協会の行事に出席されるのにお金は一切かかりません。また、改宗を勧めることもありません。信仰の有無にかかわらず、ここでは誰もが歓迎されます。また、逗子は非常に良いところです。とにかく、ポイントは二つです。改宗不要、金銭不要（一同笑い）。どうぞ皆さん、是非またいらして、平和で靈性に満ちた雰囲気を楽しんで下さい。」

新しい参加者のために、スワミーはシュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、ヴェーダーンタ協会について簡単に説明しました。「シュリー・ラーマクリシュナは、現代インドの偉大な預言者と考えられており、多くの方が彼をイエス・キリストやゴータマ・ブッダと同列に見なしています。その福音の主な特徴は、宗教の調和です。シュリー・ラーマクリシュナの最も有名な言葉に、『信仰の数だけ道がある』というものがあります。神を悟る道は一つだけではないということです。また、寺院や教会、偶像の中に神を見るだけではなく、すべての人に神を見、すべての人に仕えよ、と説かれました。」

「シュリー・ラーマクリシュナの主な弟子の一人が、スワミー・ヴィヴェーカーナンダです。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは1893年に渡米して師の福音を説きました。その際日本にも立ち寄り、日本人の気質や国民性に大変好意を抱きました。その気質、国民性とは今なお見受けられる、規律正しさ、勤勉、愛国心、美的感覚などです。有名な偉人の岡倉天心はインドにスワミー・ヴィヴェーカーナンダを訪ね、日本を再訪するよう頼みましたが、スワミーの健康上の理由で実現しませんでした。その後かなりの年月を経て、この協会が設立されました。現在、このようなセンターは世界に155ヶ所あります。」

「世界中の人々が、ヴェーダーンタ協会の普遍の思想である、調和の教えとその理論の実践とに好意を抱いています。私たちの礼拝所にはイエス・キリストや

ゴータマ・ブッダの肖像画が飾られています。こうしたことから、宗教の調和をただ説くだけでなく実践しているのがお分かりいただけるでしょう。教会では、キリスト、ブッダの生誕日もお祝いしています。これこそが、真のインド哲学、宗教の特徴です。シュリー・ラーマクリシュナやスワミー・ヴィヴェーカーナンダの教えに限ったことではないのです。」

そしてスワミーは、ヴェーダーンタ哲学の起源について簡単に話し、この宗教哲学の普遍性を強調しました。「シュリー・ラーマクリシュナは、こう教えていらっしやいます。私たちは神を違う名で呼んでいるだけなのです。ヒンズー教徒はバガヴァン、イスラム教徒はアッラー、キリスト教徒は神と呼びますが、それらはすべて同一で同じ神なのです。日本、インド、アメリカに昇る太陽は、それぞれ違う太陽ですか？太陽の呼び方は言語により違いますが、太陽そのものは一つの同じ太陽です。」

「ヴェーダーンタ哲学の思想の一部を紹介しましょう。人生の目的とは自己、すなわち神を悟ることです。自己、すなわち神を悟ることによってのみ、人生の目的は達せられるのです。世俗の喜びはすべてかりそめのものに過ぎず、霊的な喜びだけが永遠なのです。ヒンドゥイズムによれば、興味深いことに、人は神を悟るのに自分の嗜好にあった道をたどればよいとされています。」そして、スワミーは、神への愛の道（バクティ・ヨガ）、神への無私の奉仕と働きの道（カルマ・ヨガ）、哲学または識別の道（ギャーナ・ヨガ）、瞑想の道（ラージャ・ヨガ）に触れ、心と五感のコントロールについて話しました。

再びスワミーは、音楽を学ぶ学生の方々に向かって言いました。「これだけではありません。ヒンドゥイズムによれば、音楽、歌、器楽を通じて神を悟ることが出来るのです。」これについて例を挙げて説明した後、スワミーはこう続けました。「私がインドでクラシック音楽の演奏家を見た時のことです。彼らが演奏している時、私には瞑想しているように見えました。ヨギは、深く集中して瞑想している時、誰が見ているかなど気にしません。クラシック歌手や音楽家が歌唱や演奏をしている時、誰が見ているか、人に賞賛されるかなどは考えず、ただひたすら深く没頭しています。では、ヨギとそういう音楽家はどこが違うのでしょうか。シュリー・ラーマクリシュナは、同じだとおっしゃいました。身を尽くし心を尽くして本当に歌を歌うことが出来れば、神を悟ることが出来るのだとおっしゃいました。こうした例は数多くあります。ベンガル人のランプラサッドもその例で、歌を歌うことだけで母カーリを悟ったのです。」

スワミーは、再びシュリー・ラーマクリシュナの話に戻りました。「シュリー・ラーマクリシュナの生涯とその教えを学ぶと、一つのこと、非常にシンプルなあることを理解します。それは、新約聖書を読んだ時に受ける印象と同じです。極めてシンプルなことです。ゴータマ・ブッダの教えを読んでも同じ感覚を覚えます。それらを非常に難解な言葉にしてしまうのは学者だけです。しかし、悟った魂は常に、ごくシンプルで分かりやすく語ります。同時に非常に深い。この、シンプルだが深いというのが特徴です。普通の人々は皆、シンプルですが深くはありません。ですから、読めば読むほど自分が成長し、成長すればするほど、これらの偉大な魂が語ることをより理解出来るようになるのです。大切なことは、深く没頭し深く潜ることです。ただ浮かんでいるだけではダメです。」

「彼らの教えはなぜこんなにも深いのでしょうか。それは、彼らの意識が至高の意識と常につながっているからです。シュリー・ラーマクリシュナはよくおっしゃいました。『私は、母なる神の道具に過ぎない。私は機械で、母が操縦者だ。母は私に、つまずかせたり失敗させたりなどしない。』これを言い換えれば、彼らの意識は至高の意識とつながっており、彼らが言うことはすべて、万人の幸福、人類の幸福のためだと言うことです。彼らが為すことはすべて人類の幸福のために為されているのです。ですから、シュリー・ラーマクリシュナの生涯と教えをそのように学べば、それは非常に深いということをまず初めに理解するようになるでしょう。次に、それはすべて真実だということ。三つ目に、それはすべての幸福のため、人類の幸福であるということ。』

今月の思想

悪習を断つよりも悪習を防ぐ方がたやすい。
- ベンジャミン・フランクリン

忘れられない物語

友よ、それは君次第だ

靈性の修行を終えたある若者が、指導者になりたいと強く願い、新しい町へやって来た。彼は教えを説こうとしたが誰も聞きに来なかった。この町で唯一、靈性修養や宗教に関係する人々と言えば、賢いことで名高いラビの弟子達だった。若者は不満に思い、年配のラビに恥をかかせて弟子を横取りする計画を思いついた。ある日、若者は小鳥を捕まえるとラビの所へ行った。ラビは、大勢の弟子に囲まれて座っていた。

若者は片方の手のひらの中に小鳥を隠し、ラビにあからさまに尋ねた。「あなたがそんなに賢いというなら、私の手の中の小鳥が生きているか死んでいるか当てて下さい。」彼はこう決めていた。もしラビが小鳥は死んでいると言ったら、手を開いて小鳥を逃がしてやろう。そうすればラビは間違ったことになり弟子達は俺の所に来る。もし小鳥が生きていると言えば、小鳥をその場で握りつぶしてやろう。そして手の中を見せてこう言ってやる。「ほら、小鳥は死んでいますよ。」そうすれば、やはりラビは間違っていたことになり、弟子達は俺の所に来る。

彼はラビの真ん前に余裕綽々(しゃくしゃく)と座り、答えを要求した。「さあ、あなたは賢い方なんでしょう？ 答えて下さい。小鳥は生きているんですか、死んでいるんですか。」ラビは深い憐れみを込めて彼の方を見るとあっさりと言えた。「友よ、それは君次第だ。」

- (Chassidより)

例会に出席して

「日曜は、シュリー・ラーマクリシュナの第170回生誕祝賀会を行う特別な例会だ。午後の音楽プログラムにも参加が決まっている。歌も準備した。ニューズレターだって書かなくちゃいけない。ちゃんと行かなくては。」もう一度自分に言い聞かせる。月によっては日々の雑務から逃げるのが難しいことがある。こなさねばならない用事があるこれと出来てしまって時間も心も奪われる。実際には、自分のやるべきこと全体と照らし合わせてみると、それほど大切ではない用事なのに。来て良かったと楽しさを感じるのは、まず日常の生活から抜け出し、自分との約束を守って逗子に来ることから始まるのに。

初めにやることは、逗子に行けないもっともらしい言い訳を思い浮かべては否定することである。次に、礼拝室でのスケジュールを思い浮かべる。あれは何時から、これは何時からと考え、何か手伝いをする時間と何もすることがない時間は大違いだなあと思う。そこには、わくわくするようなことは取り立ててない。そして、泊まりの荷物を詰めたバッグと土曜の朝の電車時刻を再確認する。もう一度こんな考えが頭をよぎる。「お前は家でやるのが山ほどあるんだぞ。二日も留守にする余裕があるのか？」

電車が逗子駅に止まって初めて、自分がこれから二日間でやることはこれなんだと完全に受け入れられる。スーパーにちょっと寄って、最後に一本電話をしてから携帯電話のスイッチを切り、タクシーに乗って丘の上の協会に行く。玄関のホールに入ると、いつの間にか靴の数を数えて誰が来ているのか想像し始めている自分に気付く。それから、玄関に飾ってあるシュリー・ラーマクリシュナの写真が私を歓迎していることに気付き、私は挨拶してお詫びする。この通り、私はここに参りました。

壁に貼ってある仕事の割り振り表を見て、自分の名前を探す。リストには大勢の名前があり、日曜の祝賀会のために誰もが何かしらの準備を担当する。私は考える。皆も家を出るのに格闘したのだろうか。控え室の小部屋にバッグを置くと二階の礼拝室へと向かう。二階の廊下を進むと、隣の集会室は色とりどりの生花の香りで一杯である。花は種類や色毎に容器に分けて入れられ、折りたたみ式のテーブルの上に並べられている。入れ替わり立ち替わり人がやって来ては、花輪や花束を素早くこしらえていく。私は礼拝室に入って礼拝すると、時間をかけてあちこちの部屋を回り皆に挨拶をする。

台所はいつもの通り大わらわだ。開いたドアから首を伸ばして恐る恐る中をのぞき込み、「こんにちは」と簡単な挨拶で済ませるのが賢明である。鍋がいくつもガチャガチャとぶつかり、慌てた声が飛び交い、いい匂いが広がってくると、予定よりは少々遅れたもののもうすぐお昼が出てくるのだと分かる。これは逗子協会の特徴の一つなのだが、例会の時に限らずいつでも、来訪者には食事が振る舞われる。小さな食事室と隣の部屋を皆でつなげて大きな食事室にする。手伝ったり邪魔になったり。見ていても一緒になって作業していても楽しくて嬉しい。やや小さめと言えるこの協会の建物は、和室で家具も少ないことが利点である。必要に応じてどうにでも、簡単に部屋の形を変えられるからである。

おいしい昼食が振る舞われた後は、皆、自分の仕事に戻るか休憩して自由時間

を楽しむ。やがて午後もだんだんと過ぎていくと、ぼつぼつと人が帰り始める。そして、準備を一時中断して部屋を片づけ、アラータイ（夕拝）の準備をする。この夕拝に参加する人は多い。夕食後、男性の寝る場所を決める。女性の宿泊者は夜はホーリー・マザーの家に行く。

日曜の朝6時、朝の礼拝。参加者はやはり多い。朝食後、ボランティアとして手伝いにいらした方々が到着する。その数は昨日よりも多い。準備も最終段階に入り、皆の熱意、高まる期待が手に取るように分かる。各部屋は例会の参加者をお迎え出来るよう整えられ、祭壇は最後の仕上げを加えるだけとなる。プージャの道具も並べ終わる。今日のプログラムを撮影するビデオカメラがプロの手によって設置され、録画テストが行われる。マイクチェックも何度となく行われる。二階の録画機器と一階のコンピュータを接続したケーブルがテストされ、テープで床に貼り付けられる。10時25分、小さなベルが鳴ると、かなりの数の人が集まってくる。

礼拝室は、10時半頃にはほぼ一杯になり、さらなる参加者が見込まれるため、スワミー・メダサーナングは皆に、前の方に寄って出来るだけ詰めて座るように呼びかける。スワミーが短い礼拝（プージャ）を行う間、部屋は静けさに包まれる。今日の例会には初めての参加者が多く、特にタブラ等のインド音楽を学ぶ学生さん達がいらしているので、スワミーは、礼拝に使う様々な道具がどんな意味を持ち、何を象徴しているのかを簡単に説明する。学生さん達は、先生のディネーシュ・ドウンディさんが午後の音楽プログラムで演奏をされるので、一緒に参加されている。来訪者の数はますます増え、スワミーの講話が始まる頃には部屋に入り切らなくなる。（「3月の例会 - シュリー・ラーマクリシュナを理解する」をご覧ください。）

午前の講話が終わり、昼食が提供される。参加者は百名を超えているため、これには超人的努力が必要である。講話用の部屋にまでテーブルが並べられる。隣の部屋にはもっと多くの席が用意されている。一階では食堂にぎりぎり一杯まで席が作られているがそれでも足りない。廊下や小さなライブラリにも席が用意される。まさにすし詰め。大混乱。それでも皆、空腹なので大満足である。食事は大変おいしい。いや、世界で一番口やかましいグルメさえ唸らせるほどだ。食事が終わると片付けが始まり、部屋を元に戻して、音楽プログラムのためにステージがしつらえられる。マイクテストや楽器の音合わせをしているうちに、皆が集まり始める。

3時、スワミーが皆に挨拶をし、特別音楽プログラムが始まる。演目は以下の通りである： バスワティ・ゴーシュさん、タヌスリ・ゴールダーさん、ニランジャナ・チャンドラさんによるインドの讃歌、ソマ・チョードリーさんによるヒンディー語の美しいバジャン、サムドラ・ダッタ・グプタさんのハルモニウム演奏と歌、ディネーシュ・ドウンディさんのタブラ演奏、泉田香穂里（シャンティさん）による自作の日本語の讃歌（2曲披露。演奏前に英語で歌詞を説明）。小生も、自作の英語の歌をCDのBGMに合わせて歌う。そして、短い休憩を挟んで、大トリの登場。井上憲司さん（逗子近郊にお住まいの音楽の鉄人で、協会での演奏をお願いすると決して断らない方、とスワミーが紹介）とディネーシュ・ドウンディさんのタブラによる崇高なるラーガが二曲演奏される。

音楽プログラムは優に2時間を超える一大行事となる。私は、午後遅くの紅茶が提供されている最中に失礼する。バス停に向かって坂を下っている時、スワームーが午前の講話で話した、米国の学校で行われた調査のことを思い出す。調査で生徒に対し質問したのは、生活の中で直面する現実の様々な問題をどう解決すればいいか学校や親が教えてくれるかということだった。現実の問題とは、家庭や学校、職場で体験する、自分の内面的な問題、人間関係のもつれ、挫折、失望などである。答えは、70~80%が「ノー」であった。いい仕事に就くための方法は教えてくれても、幸福な人生を送る方法は教えてもらえないのだ。大人になればこうした問題にどんどんぶつかると、解決する術を知らない。これは問題である。「深く潜りましょう」とスワームーは言った。「シュリー・ラーマクリシュナは、『表面に浮かんでいないで深く潜れ』とおっしゃいました。そうすれば、知識を本当に理解し教育を受けたことがためになるのです。」

「そうだ。」バスが停まり、私は独り言を言う。「正しい師を見つけることが出来たなんて、何という幸運だろう。おとといの晩、お前は協会に行けないありとあらゆる言い訳を考えていた。ここの雰囲気、靈性高き人との交わり、祈り、音楽、食事……。一体お前は何てことを考えていたんだ？」

(記者記す)

=====

発行：日本ヴェーダータ協会
249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel：046-873-0428
Fax：046-873-0592
Website: <http://www.vedanta.jp>
Email: info@vedanta.jp
[KENB020J]

=====